

ブルーストと哲学教育

— 師ダルリュの教育観（1881年の演説）について* —

...le grand philosophe dont la parole
inspirée, plus sûre de durer qu'un écrit, a,
en moi comme en tant d'autres, engendré
la pensée — Marcel Proust, *Les Plaisirs
et les jours* ⁽¹⁾

横山裕人

はじめに

1888年リセ・コンドルセでの哲学教授アルフォンス・ダルリュ Alphonse Darlu (1849-1921)との出会いは、青年ブルーストにとって、学校時代の思い出の中でもとりわけ重大な事件であったのだろう。『楽しみと日々』献辞や『胡麻と百合』の或る訳註の中で、公然と師に対する礼讃とオマージュを捧げる一方で、ブルーストは秘かにブーリエ先生 M.Beulier の名の下にその姿を生き生きと描き出しているからである。この『ジャン・サントゥイユ』と名付けられた未定稿の発掘が、書物をもって自分の墓碑としなかったダルリュの名前に、思いがけないところから再び光明を注ぐことになった。消えかけていたその名前は、今やブルーストという「記念碑」に刻まれた署名の一つとして語られることになったのである。

実際、アンドレ・フェレ著『マルセル・ブルーストの学校時代』（1959）とアンリ・ボネ著『マルセル・ブルーストの哲学の師——アルフォンス・ダルリュ』（1961）は、未発表の資料を用いながら、リセ・コンドルセの哲学教授とブルーストの交流の持った重大な意味をブルースト研究者に初めて明らかにしただけでなく、アンドレ・カニヴェから、ポール・ジェルボを経て、ジャン＝ルイ・ファビアニに至る第三共和政期の哲学教育に関心を寄せる研究者にも、この教育の恰好の範例として、ジュール・ラニョーとアラン（エミール・シャルティエ）の師弟と並び立つダルリュ＝ブルーストの師弟関係を提供してきた⁽²⁾。

さて、本稿は、上記のフェレ、ボネの研究の補遺として、両著で採り上げられなかった、ダルリュの一演説を紹介するものである。その演説とは、ダルリュが1881年そ

の赴任先のボルドーのリセの「褒賞授与式」distribution des prix で行なったもので、哲学教育を主題としている⁹⁾。勿論ブルーストが直接耳にしたものではなく、おそらく、印刷された形でも眼にしたことはないと考えられるが、ダルリュが哲学教授として自分の教え子を中心にした聴衆に向かって自らの担当教科の意義を闡明する点で、この演説は、これまで紹介されてきたダルリュの著述以上の興味を有するだろう。

しかし、このようなダルリュの著述や教授の内容を、当時の哲学教育のコンテクストから切り離して論じ、それとブルーストの作品に現れた思想との類似性を強調するとしたら、それは些か早計に過ぎるのではなかろうか。それは先ず第一に、教育制度の中での教師の役割の問題に関わる。教室で全く自由に教師は語る訳ではない。カリキュラム(フランスでは、「plan d'études」、「programme」という)が、かれの採り上げる話題を、時には下すべき判断までも規定しているのである。従って、果してダルリュの語る思想は、彼自身のものなのか、それともカリキュラムのものなのか、という問いが当然生じる。

更に、第二に、教育内容が生徒によって、いわば消化されていく過程の問題にも繋がるであろう。古典古代から修辞学と共に受け継がれた、演説・詩・論文の実作練習の強固な伝統は、我々日本人に理解の及ぶ点があるが、ブルーストの時代にも多少形式に変化は生じたものの、依然盛んであった。その最たるものが、あの、パリとヴェルサイユのリセ・コレージュの俊英を対象としたコンクール・ジェネラルである。そこでは、歴史、哲学は勿論、理科の諸学科も論文の形で評価されるのである。こうした書くことの日常的実践が、ブルーストのみならず多くの作家(中等教育に無関係の作家を探す方が困難である)の誕生に影響しなかったとは殆ど考えることができない。従って、作家の学校時代に書き残した作文の類を、当時の教育体系の枠組みを参照しながら読み解くことは、文学史研究にとっても十分意義のあることではなかろうか。

このような展望に立って、筆者は、ブルーストの受けた哲学教育の実情を今少し解明することを目指す。その為の一方策として、ブルーストの師の教育観を検討してみたいのである。本稿では、先ず、このダルリュの演説のコンテクストとなりうる情報をまとめてみよう。次いで、演説の内容の分析を行ないたい。

1. 演説のコンテクスト

【哲学教授ダルリュ】

(1) リセ・コンドルセ着任以前のダルリュ

初めに、ボネの研究のおさらいになるが、ブルーストと出会うまでのダルリュの経歴を簡単に振り返っておこう¹⁰⁾。

1849年3月20日ボルドーに程近いリブルヌの町に、その地のコレージュ教師の子供として生まれた彼は、父の配転¹¹⁾に伴いカルパントラ(1851)を経て、ペリゴール地方ベ

ルジュラック⁶⁰の町にやってくる。彼が中等教育を終えたのも、父が教鞭を執っていたこのコレージュでのことである。こうして文科バシュリエと理科バシュリエとなった彼は、1866年1月父と同じ学校の第6年級教師として、教職の道に入ったのである。翌年歴史教師の父を失う⁶¹。彼は、今度は、文学士号を取り、1868年秋一旦、ジロンド河畔ブレーのコレージュの人文学級教師に任命されたが、直ぐに古巣のベルジュラックに戻り修辞学級教師の職に就いた。

彼の生涯の転機は、1871年にやってくる。田舎町のコレージュ教師という冴えない境遇の青年は、まだコミュニューの「騒擾」の余燼冷めやらぬパリに出て、見事難関の哲学アグレガシオンに合格するのである(1871年9月)⁶²。この年の合格者は二人だけで、しかもダルリュは、自分より年長のノルマリアン(アルフレッド・エスピナス)と一位の座を分け合った。それから、リセの哲学教授としての経歴が始まる。最初の赴任地は、ベルジュラックにもっとも近いペリグーのリセ(同年9月)、続いて隣県アングーレームのリセ(1873年10月)、そして1879年9月には、大学区の中心地ボルドーのリセに着任する。このボルドーのリセは、代々アルフレッド・フィエ、アンリ・マリオン、フランソワ・エヴランなど錚々たる人物を哲学教授に迎えて来たとし、当地の文科大学も、後に高等教育改革を推進するルイ・リアルを哲学の講座に擁していた⁶³。また、俸給の面でも地方リセの内の第1カテゴリーに属し、そのまま勤続しても相応の名望が得られる悪くないポストであった。しかし、彼は地方に留まるよりもパリに行くことを選択したのである⁶⁴。

1882年まずリセ・サン＝ルイに着任、84年には、リセ・ルイ＝ル＝グランに任命されるが前任者が転出せず結局リセ・アンリ・カトルに転任する。リセ・コンドルセには、1885年1月この哲学教授を長年勤めてきたバンジャマン・オベ Benjamin Aubé の病氣療養中の代講 suppléant として、兼任のままやってきたのが初めである。やがてその年の新学期から、アンリ4世校を去って、正式に引退したオベの後任として哲学教授の地位に就き、ここに彼の哲学教授としての輝かしい名声を生み出した、素晴らしい生徒達と出会うことになる⁶⁵。

(2) ダルリュの「師」

ダルリュは、ノルマリアンでもなく、パリで学んだわけでもない。従って、当時のパリで哲学を志す若者のように、ユルム街で新進気鋭のジュール・ラシュリエの講義を熱狂的に書き写すことも、ソルボンヌで、まだ威光の消えぬヴィクトル・クーザンの弟子達の講義を聴くこともなかったのである。第一、まだ20歳前のダルリュは、ベルジュラックのコレージュで教えながら、父亡き後の一家を支えねばならなかった。

では、全くの独学で彼は哲学を学んだのであろうか。そこで、「力としての観念」idée-force という概念を思想の中核に据えた哲学者アルフレッド・フィエ Alfred Fouillée (1838-1912) の名が浮かび上がる⁶⁶。X. レオンは師の追悼記事の中で、「[1868年] 彼は、自分の教え子フェルナン・フォールの貸してくれた、A. フィエの『プラトン』によ

って哲学に導かれた⁽¹³⁾。」と述べている。実際、当時(1866-1872) フィエは、ベルジュラックにもそう遠くないボルドーのリセの哲学教授の職にあった。学士院のコンクールでの2度の受賞や1869年に刊行された *La Philosophie de Platon* の好評によって、その名がダルリュの関心を強く引いたのに違いない⁽¹⁴⁾。

更に、後の事であるが、哲学関係の月刊誌に掲載されたダルリュ執筆の記事からも、それは傍証されよう。テオデュール・リボの創刊した『内外哲学評論』 *Revue philosophique de la France et de l'étranger* は、たびたびダルリュの原稿を掲載しているが⁽¹⁵⁾、その中には、フィエの著書や思想を論じたものも含まれている。例えば、1880年1月号の書評欄では、*L'Idée du droit en Allemagne, en Angleterre et en France* (Hachette, 1878) を扱っているし (t.9, p.90-98)、1887年6月号には «La liberté et le déterminisme selon M.Fouillée» という論文を発表している (t.23, p.561-581)。

これらの記事の中で、ダルリュは、3人称体ではあるけれども自らの体験を語っているようである。例えば、「[見事な想像力の自然に発露した、結論部の雄弁の中に] 幾人かの特権的読者は、自分がかってボルドーの文科大学で喝采を送った魔法のような言葉の抑揚を再び捉えることができよう⁽¹⁶⁾。」「[大反響を巻き起こした彼の博士論文審査の] 変わらぬ思い出を、列席者はまだ保ち続けている⁽¹⁷⁾。」「[私の世代の人間の] まだ若かった理性は、[彼の著書の中で] いわば形而上学的陶醉を味わったものである、講壇哲学の節制のお蔭で少々味気のない体制に自分たちが落ち込んでいた時代に⁽¹⁸⁾。」など、並々ならぬ心酔ぶりを物語っているのだ。しかし、ダルリュは、フィエの思想を全面的に受容したわけではない。前述の1887年6月の論文を見ると、フィエの出した結論に承服していないことからわかるように、ダルリュは思想における独自性を崩そうとしないのである。

【1881年の教育界と哲学教育】

(1) 「強化され解放されたユニヴェルシテ⁽¹⁹⁾」

次に、この1881年という年が、フランスの教育史の中でどういう位置を占めているのか述べてみたい。丁度この頃、教育界は大変貌を遂げるところであった。共和派が上下両院で多数派となる(1879年1月)という政治状況を背景として、教育界でも、前大統領マク＝マオンの「道徳的秩序」体制からの脱却と、自由帝政下の文相ヴィクトル・デュリュイ、1870年の文相ジュール・シモンの改革路線の継承と改革の徹底化が、進行中であった。その結果として、1850年の「ファルー法」以後のカトリック勢力による公教育の支配は完全に覆り、共和派が望んでいた脱宗教的な *laïque* 公教育が実現しようとしていたのである。

具体的に見てみよう。1879年2月文相に就任した、共和派の指導者の一人ジュール・フェリーは、まず局長、大学区長の人事を刷新した上で、3月には諮問機関の公教育高等評議会 *Conseil supérieur de l'Instruction publique* を改組する法案を議会に提出する。

改革全体の成否を握るこの法案は、聖職者、軍人、法曹、実業界代表といった委員に象徴される、外部からの干渉を極力教育から排除して、ユニヴェルシテに、「学問に携わる人間による学問の統治¹⁰⁾」を実現することを目指していた。翌年2月漸く成立したこの法律によって、教員団としてのユニヴェルシテは、これまでの上意下達式の組織から、自律的な組織へと脱皮する根拠を獲得した。

1880年4月新しい高等評議会の委員が活潑な運動を経て選出され、5月31日第1会期が開幕する。先ず中等教育改革が中心議題となった。その答申を基に、矢継ぎ早に、バカロレアの改革(1880年6月19日のデクレ及びアレテ)、カリキュラムの改革(同年8月2日のアレテ)が発令された。これら一連の中等教育改革の方向性は、従来の記憶力偏重の弊を取り除き、生徒の判断力と自発性を育成することにあった¹¹⁾。その結果、古典語教育に大鉈が振るわれ、ラテン語演説・詩作が消えることになった。その一方、高等教育では、学位授与権が再び国の教育機関に接収(1880年3月18日の法律)され、リサンス・エス・レットルの規則も改正(1880年12月25日のデクレ)される。その他、国立の女子リセの創設(「カミュー・セー法」1880年12月21日公布)や、公立の初等教育の無償化、続いて義務化と脱宗教化(二つの「フェリー法」1881年6月16日、1882年3月28日公布)が始まる。このように、教育全般の大改革が、とりわけカトリック勢力からの強い反対を押し切って、フェリーとその後継の大臣らの手によって進められていった。このように1881年は、まさに教育界の大変動の渦中にあつたのである。

(2) リセの哲学のカリキュラム

当時、哲学教育は、文系の最高学年の「哲学級」で週8時間、理系の「基礎数学級」で週2時間教えられていたが、実は、一旦「論理学」に身を落とした時代もあった(1852年4月10日のデクレ・同年8月30日のアレテ)。権威帝政下の文相H.フォルトゥールに哲学は帝政への忠誠を疑われたのである。しかし、V.デュリュイが文相の座に着くや否や、哲学アグレガシオンと共に復活される(1863年6月29日のデクレ)。以後、履修者数の増加につれて哲学教育の名声も高まっていた¹²⁾。

一方教育内容はいかなるものであつたのか。1863年の復活後も、そのカリキュラム(1863年7月14日のアレテ)は、七月王政期の哲学界に君臨したV.クーザンの主導の下に形成された大枠に準拠していた。つまり、心理学、論理学、倫理学(道徳)、形而上学の4部門に大別され、これに哲学史の題目を併設する形である。それ以後1902年の中等教育の大改革まで、1874年7月23日、1880年8月2日、1885年1月22日の各アレテで、哲学のカリキュラムは少しずつ修正されていくが(更に指定著作家のリストは、1895年8月8日に一部修正)、この大枠はずっと維持されている。

カリキュラムは、これらの各部門で扱うべき主題或いは問題の集まりであつた。問題であるから、必ずしもその解答を具体的に明示してあるわけではなく答えを見出すことは教室での教師と生徒の実践に委ねられていたし、問題を取り扱う順序にしても、特に1880年のものでは原註で断っているように、教師の裁量の下にあつた¹³⁾。しかし

本稿の末尾に附したカリキュラムの実例⁽²⁴⁾からもわかるように、問題の設定そのものが自然に特定の教説を浮かび上がらせるようになっていた。例えば、新しく比較心理学への配慮も示す心理学では、内観 *introspection* によって得られた結果から精神の働きを感性 *sensibilité*、知性 *intelligence*、意志 *volonté* に三分する伝統がやはり前提となっているし、形而上学で、精神と物質とを対立させて考察すること自体、「靈魂の非物質性 *spiritualité de l'âme*」(靈魂に物質とは異なる実体を認める説)という唯心論 *spiritualisme* の根本教義を背景にしている⁽²⁵⁾。更に、単にファキュルテに進学する資格を与えるだけでなく、中等教育の教員や官吏任用の前提ともなる文科バカロレアでは、第2部試験での哲学に関する小論文がこのカリキュラムの範囲から出題されることになっていた⁽²⁶⁾。従って、教師は、教授法に關しての裁量権を認められていたとしても、教育内容の面では大幅な制限を受けていたと言えるのではないか。そこで、学校の外部での思想の流行を考慮する必要があるけれども、哲学教育を通して、唯心論の教義が、用語や発想法の形をとって、程度の差こそあれ生徒の精神の中に浸透していったと考えることもあながち不自然ではないだろう⁽²⁷⁾。

【褒賞授与式】

16世紀の末イエズス会のコレージュで始まった褒賞授与式の伝統は、大革命後誕生した国立の中等教育機関リセにも継承された。毎年その学年の最後に盛大に行なわれた式典には、全校の教職員と生徒の出席は勿論のこと、生徒の家族とともにその地方の各界の名士が列席して祝典に華を添えた。式典の進行は、公教育大臣の代理として議長 *président* に指名された人物、例えばパリでは、総視学官、学士院会員或いは学校と縁の深い政治家などによって執り行なわれた。各学年・各科目の成績優秀者の発表と月桂冠・賞品の本の授与という主要行事の他に、議長役の名士と大抵着任後1年経ったそのリセの教授が、演説を行なうのが恒例であった⁽²⁸⁾。こうした式典の模様は(世紀前半の模様については、フロマンタンの小説『ドミニック』第8章やドーミエの諷刺画にその雰囲気が見られるが)、地元紙でも詳しく報道され(パリならば、*Le Temps* のような新聞に載るのだ)、そこに掲載された成績優秀者の名簿は、その町の市民の興味を大いに掻き立てたものである。

これが、コンクール・ジェネラルの褒賞授与式ともなると、当時のユニヴェルシテにおける年中行事の中でも一大盛儀となる⁽²⁹⁾。

毎年7月の末か8月の始めのある日の正午ソルボンヌ正面玄関に、共和国衛兵隊に先導された馬車が到着する。中から紫のガウンを纏った「ユニヴェルシテ総長 *grand maître de l'Université*」、即ち公教育大臣(文相)が、中等教育局長など彼のスタッフに伴われて現れ、パリ大学区長代理の出迎えを受ける。それから、神学大学を先頭に、医、法、理、文科大学、最後に薬学校の順にソルボンヌの各ファキュルテを象徴する権標 *masse* を手にした先導役 *massier* に続いて、総長、パリ大学区長代理、各ファキュルテ

の学長 doyen、学士院のお歴々、公教育高等評議会の委員に外国の大使、上下両院の議員、高位の将官が加わった一行が、大講堂に入場する⁽⁹⁰⁾。その一行を、階段座席の方に座った、大学の教授たち、校長に率いられた各校の受賞者、また傍聴席の方に詰めかけ、早くわが子の晴れ姿を見たいと待ちかねている受賞者の家族が、盛大な拍手で迎える。

やがて、総長は開会を宣し、このはれの日の演説役に指名されたりセの教授に始めるように促す。ところで、この大役は1880年まで修辞学教授の独占するところであった。と言うのも、この演説はラテン語で行なわれていたからである(リセ・コレージュ別の式典では既にフランス語が用いられている)。しかし、ラテン語演説とラテン語詩作がリセのカリキュラムから消えたのに伴って、1881年からは、フランス語の演説が取って代わり、弁士も、修辞学以外の科目からも選ばれるようになった。1881年という中等教育改革の最初の成果を収穫する年の式典では、一人の哲学教授が指名されていた。アンリ4世校の教授で公教育高等評議会の委員(哲学アグレジェ代表)を務めていたアンリ・マリオンである。その後、幾人かの哲学教授がこの役を務めており⁽⁹¹⁾、ブルーストの師ダルリュも1890年にこの光栄に浴した⁽⁹²⁾。

さて、この演説に続く総長＝公教育大臣の演説がやっと終わると、漸く待ちに待った受賞者の発表と表彰である。受賞者の生徒は、自分の名前が高らかに告げられると、学友の喝采に包まれながら、雛壇に歩み寄り、月桂冠とともに、ソルボンヌの紋章をあしらった豪華な装釘の書物を、その順位に応じた冊数だけ授与された⁽⁹³⁾。最後に、パリおよびヴェルサイユ以外の地方のリセ・コレージュの間で行なわれたコンクールでの受賞者のリストが読み上げられて式は終わった。なお、受賞者の内、幾人かは、その後大臣の晩餐会に招待された⁽⁹⁴⁾。

このように、褒賞授与式というものは大変仰々しい式典であったのだが、ここでその性格を考察しておくことは、恒例演説の性格を捉える上で欠かせない。残念ながら、各校別の褒賞授与式については、あまり資料が集められなかったので、主に、その全国版ともいえるコンクール・ジェネラルの式典を対象にする。

このコンクール・ジェネラルは、教師・生徒間の過熱した競争の弊害が叫ばれるようになって、1903年のものを最後に一旦廃止されてしまうのであるが(1921年7月19日のアレテにより復活)、廃止論を唱える人々も、褒賞授与式まで一緒に葬り去ることに難色を示したのである。公教育高等評議会の委員で、コンクール・ジェネラル廃止の提案を行なった、ギュスターヴ・プロ Gustave Belot (哲学アグレジェ代表)とルイ・ガルーエデック Louis Gallouédec (歴史地理学アグレジェ代表)の両名は、その提案のなかで、「コンクール・ジェネラルの褒賞授与式には、それがユニヴェルシテを公衆と諸公共機関とに一度に接触させる一大祝典であるという所に、少なくとも利点があり、かつまた、ユニヴェルシテが我々の政体の中で占める地位、とりわけ中等教育の重要性を明らかに示すに相応しい、学校の祭典をどれも廃止してしまえば、遺憾なことである⁽⁹⁵⁾」

という理由で、コンクール・ジェネラルの廃止後も、従来の式典よりも開かれた性質の、「ユニヴェルシテの果たす社会的機能⁽³⁵⁾」と「中等教育の固有の存在と根本的な役割⁽³⁶⁾」とを国民の眼に顕示するような、ユニヴェルシテの祝典の創設を検討するように、求めている⁽³⁶⁾。

ここに明確に認められる式典の顕示的性格には、二つの側面がある。まず、式典で行なわれた演説の伝えるメッセージの中で、ユニヴェルシテの役割やそこで教えらるる学科の意義が、繰り返し説かれていることである。例えば、ユニヴェルシテ総長である公教育大臣の演説は、この1年間の教育成果を讃え、今後新たに導入される改革案を披露するものであった。一方、リセ教授による恒例演説の方は、毎年その題目を見ていくだけでわかるように⁽³⁷⁾、各人の属する学科の擁護あるいは「学問の勧め」になっていたのである。また、注意しなければならないのは、各校別の褒賞授与式には恒例演説に対する事前検閲の制度があったことである。1873年10月29日のアレテにも「前条までにいう学校祭においては、いかなる演説も、事前に議長による同意を受けることなくして、発せられてはならない⁽³⁸⁾。」と述べられている。議長自身公教育大臣の指名によるのであるから、結局間接的にせよ文部当局により統制されているわけである。従って、演説の主題は、慣習上も制度上も固定化したものにならざるをえなかったのである。

次に、式典自体がスペクタクルとしての性格を帯びていることである。先にも述べたように、共和国衛兵隊によるファンファーレや国歌吹奏、大きな絵画を掲げた広い講堂、古式床しく入場して、その地位の高低の順に従って壇上に居並ぶユニヴェルシテのメンバーたち。中でも、彼らの服装は、ナポレオンの時代、アンシャン・レژیーム期のそれに倣って制定された(1809年7月31日のデクレ)式服であり、その色や細部の型の変化によって、各メンバーの序列や所属が示されていた。そうしたしきたりに疎い、生徒の親たちでもその色形には眼を奪われたことであろう⁽³⁹⁾。

このようにコンクール・ジェネラルの式典がスペクタクルとしての要素を色濃くしているのと同じく、各校での式典も、その縮小版としてその町の一大スペクタクルとして祝われたと考えられる。

2. 演説の分析

【演説の概要】

さて、1881年8月3日水曜日ボルドーのリセの褒賞授与式で行なわれた、ダルリュの恒例演説の分析に取りかかろう。詳しく検討する前に先ず全体を概観しておくのが、有益であろう。なお、以後の参照の便宜を図る為、アリネアで分けられる単位を無条件で、一つの段落として扱い、最初から順に番号を振ることにした。以後、丸付数字が段落の番号を示し、全部で13段落になる(その後の数字は原文の頁付)。

「親愛なる生徒諸君」という恒例の呼びかけで始まる、第1段落①(1)と、列席の貴賓や父兄への呼びかけで始まる第2段落②(1-2)とは、演説の序説にあたる。ここでは、修辞学の規則どおり、生徒とりわけこの日を以て学園を去る卒業生にはこれまでの師弟の誼みに訴えて、招待客にはリセに対する貢献を讃えて、それぞれに傾聴を乞い、そして②の最後で、演説の主題すなわち「中等教育における哲学の役割と哲学の学習について⁽⁴⁰⁾」を、提示する。

③(2-3)一最近おこった一つの体験談から本文を説き起す。それは、「哲学とは一体何か」という知人の問いに対して、返答に窮してしまったというものである。続いて特定の科学でも技芸でもないという否定的規定を与えた後、高等教育と中等教育とでは哲学教育のあり方が全く違うことを示し、中等教育に携わる者に要求される二つの「誓願」と、中等教育全体の目標(「思考するということを学ぶ」)とに触れる。

④(3-4)一そのような中等教育の中で哲学はどのように位置づけられるかが語られる。俗説に反して、哲学の学習は形成過程にある青年にも貴重であり、哲学は、「教育の様々な対象についての省察の一般的方法」として、それまでに習得した多様な知識に統一性を与えるということから、諸学科の「頂上」に立つとされる。

⑤(4-5)一ここでは、哲学の定義づけが試みられる。「物事の見方」であると言っても、流行のリアリズムではない。世界は万人に対して単調・一様な現れをするわけではない。「我々は一人一人、自らの魂の色に染め上げられた個々の世界の中に生きている。」

⑥(5-6)一いわば自分のこれまでの眼とは違う眼を与える哲学は、まず、普段用いている言葉の見直しを行なう。この「言語の回り階段」の降下、語の起源への遡行によって、人間の思考活動が言葉からいろいろな形式・意義を受け取っているという「囚われの身」にあることを確認させる。従って、人間の思考の産物である科学の形態や用途も、哲学によって説明の対象となるのである。しかし、自然の力を利用して人間の役に立つ自然科学も、依然中世の錬金術に譬えられる程、真理はとらえがたいのである。哲学を学ぶ当初に生徒が不可解さを感じたのも、プラトンの比喩にあるように「限り無き真理の大いなる光」に暫し眼が眩んだからである。

⑦(6)一以上が、精神の解放という哲学の第一の務めであるが、これによって、今までの「本能的な信念」を解体するといっても、何も生徒を懐疑主義に陥れる為ではない。言語、諸科学、社会、精神自体も、実は人間による「芸術作品」であることを理解させて、生徒の信念の純化・深化を図っているのである。

⑧(6-7)一換言すれば、全てを説明しようという性分(科学的精神)は、哲学的精神の半ばに過ぎず、理解を通じて万物の讃美へと至る為にある。思考の働きかけによって、対象は驚異となる。しかし、エマスンが見事に指摘したように、我々は美に取り囲まれているのにそれに気付かないでいる。ところが、「哲学は、事物の外観を更新し、

それらの色彩を蘇らせ、習慣の生み出した無気力から思考活動を引き戻し、思考に驚きの感覚を返し、事物の真理をなすものこそ、それらの美であると理解できるように思考に用意をしてやるのだ。」リセのカリキュラムには、美学の項目があるが、美そのものは物ではないから教えることはできない。ただ、美を感じることを教えらるるに過ぎない。美に感動した精神の昂まりが、事物の独創的なヴィジョンを産み出すのだ。敢えて言えば、哲学全体が美学講義になるのである。

⑨(7-10)一更に、哲学は倫理学講義にもなるべきである。プラトンもいうように徳は教えられない。だから、倫理学の一部である社会学(経済学は哲学のカリキュラムに採用されている)の教える経済学的知識や統計は、人間の霊的精神的完成とあまり関係を持たないのである。どんな学問も軽蔑されるべきではないが、その「品位」には差がある。事実の過剰な詰め込みは、道徳を窒息させる。一般人の科学万能の考えは、即物的リアリズムに由来するが、それは一部の哲学者にも及んでいる。彼らは、人間の幸福を工作機械のように考えているが、物質的幸福しか念頭になかったミダス王の不幸を忘れてはいけない。真の楽園は、我々の心の中にあるのだ。科学にはそれを発見できない、道徳哲学によってこそ涵養できるのだ。結局、幸福に至る道とは、気高く活潑な魂を子供のうちから育て上げることである。また、歴史の差し出す「鏡」の中には道徳的な教訓を読み取ることができるだろう。そうした魂の持ち主にとって、事物は究極の変貌を遂げて、畏怖の念を起こさせよう。「自らの神を前にしての各々の魂の崇高なる問わず語りが始まる」この孤絶の境地において、哲学は宗教に席を譲るのである。しかし、哲学は生徒の進路をこの方向に限定するわけではなく、学問・芸術・宗教へと多方面に開花する筈の、秘められた才能を尊重している。それらの目標に優劣があるかどうかは哲学が決めるものではないが、「精神のあらゆる美質が結び付き、人事百般の調和を十分に味わえるような一つの点」がある。そこに、大哲学者(アリストテレス、ライブニッツ、カント)は、生徒を引き上げるのであり、我々哲学教授は、彼らの「通訳」に過ぎぬ。さて、今やこの先哲が「象形文字で」書き残した、「普遍的なるものを感じ取り思考する為に無私になること」という言葉を告げる時である。これこそ文明の秘鑰である。結局、哲学教育の目的は、生徒の思考の中でこの大変抽象的な公式が血肉と化すようにすることなのである。

⑩(10)一さて、哲学者は、日常茶飯事のように壮大な事柄を語るが、決して単純にそうしているわけではない。思想を形成するには言葉の訓練が必要だが、我々こそ、言葉の秘密を知り、真理に則ってそれを用いることができ、生徒の口から誠実に欠ける言葉が漏れるのを防ぐのである。

⑪(10-11)一次いで、哲学教育を歪める二つの原因(多弁で内容空疎な教説と党派的宣教)に触れるが、後者については、危険性は薄いと言う。何故なら、我々哲学者はみな、プラトンのいうアトランティスに住んでおり、この「現実世界の遥か彼方にある棲み処」では、党派心に煩わされることなく、自由に論じられるからである。

⑫(11-12)―最後にバカロレアに触れながら、科学教育の意味に言及する。文科バカロレアの試験に新たに理科の作文が加わり、また、理科バカロレアの方は、グランゼコールへの踏み台になっている。理科(科学)は一般的教養を補完する。数学は抽象性の故に方法というものを強調し、物理・化学・博物学は科学的自然観を提供する。これらの重みが、宗教と拮抗して人間の思考活動の均衡を保つ。

⑬(12)―結論の段落だが、哲学に政治的野心のないことに触れた後、演説の要旨を繰り返し、モリエールからの引喩で締めくくって終える。

以上が、ダルリュの演説の要旨である。

【内容の分析】

(1) V. イザンペール＝ジャマティの方法

この1881年の演説を分析するにあたって、同種のテキストを多数取り上げて社会学的考察を行なった研究を参照することは、ダルリュの演説を時代の中に位置づける上で有益であろう。実は恰好の研究がある。1970年に刊行された『社会の危機、教育の危機―フランス中等教育の社会学』⁽⁴⁰⁾がそれである。この中でヴィヴィアンヌ・イザンペール＝ジャマティは、1860年から1965年までに全国の学校で行なわれた褒賞授与式の演説約2000を母集団にして、所在する都市の規模と10年間隔でそれを40の子集団に分割し、そこから抽出されたサンプルに対して、予め設定された諸テーマの出現状況を調べた。統計的処理⁽⁴¹⁾を施した数値を基に、中等教育の目標に関する諸テーマが時間軸に沿ってどう変化するかを追うことで、他の社会現象との関係を考察しようとしたのである。その最終結論は本稿とは差し当たって関連がないが、この研究で用いられたテーマ分析を、ダルリュのテキストにも適用すれば、同時代の同種のテキスト群との比較が可能になる。次に、イザンペール＝ジャマティが設定したテーマを見てみよう。5つの領域aireの下に全部で30程のテーマを設けているが、我々はその中から最も重要な第1の領域、中等教育の目的に関わる諸テーマを中心に据えてダルリュの演説の分析に用いたい⁽⁴²⁾。

1. 教育の目標として、生徒の内に生み出すべき変化。

- | | |
|-----------------------|---------------|
| 1) 永遠の価値への参入 | 4) 作業装置の訓練 |
| 2) 上層の社会階級への統合 | 5) 外界の変形手段の獲得 |
| 3) それ自体の為に追求さるべき個人的洗練 | |

では、この5つのテーマが、ダルリュの演説の中でどう出現するかを見ていくことにする。

(2) 知的能力の訓練としての哲学教育 ― 「作業装置の訓練」のテーマ

第一に、4)の「作業装置の訓練」(Isam. 32-33)のテーマから見ることにする。このテーマは、イザンペール＝ジャマティによれば、生徒の知的諸能力、「自らの思考をあ

らゆる種類の対象に適用し、合理的にその理解を図る能力」(Isam. 33)の訓練を、中等教育の役割とするものである。従って、しばしば、それぞれの教科は、その内容よりも、知性の訓練の場を提供することで評価されるという事態も生じるという(cf. Isam. 33)。

ダルリュの演説の中で、このテーマはどのように出現しているだろうか。我々は、中等教育と高等教育とを区別する③で、ダルリュが、『ポール・ロワイヤル論理学』の一節⁽⁴⁾を引きながら、中等教育を逆説的に規定しているところに出会う。

我々の生徒の方とは申しますと、彼らが我々から学び取る知識はすべて、その後でそれを忘れる為にあると言ってもよいぐらいです。ここで、すぐれてあのポール・ロワイヤルの思想があてはまります。「学識の獲得の為に理性を道具として使うのではなく、理性の完成の為に学識を使うべきなのだ。」これこそまさに、我々の教育の要石であります。思考することを学ぶ、これが我々の課す訓練の存在理由であり、目的なのであります。(p.3)

ここで、「我々」というのは、哲学教授に限定されるのではなく、この段落では、中等教育の教員を包括的に示すと考えるべきである。中等教育として、各教科の内容、教えられる知識以上に、知的訓練を重視する姿勢が垣間見える。では、哲学はこの目的に貢献するのか。続く段落④で、「教育の様々な対象、言葉、観念、事実、暮らしぶりについての省察の一般的方法」(p.4)として哲学を捉えてみればそれが中等教育の諸教科を総括する役割をもっているということに注目させているのだから、哲学教育も、中等教育全体を考えた時と同じく、「作業装置の訓練」という目的を担うとダルリュが考えていることは間違いない。

(3) 無償の個人的洗練のテーマと哲学教育

次に、「それ自体の為に追求さるべき個人的洗練」(Isam. 30-32)のテーマを見てみよう。イザンベール＝ジャマティも初めに断っているように、あまり輪郭のはっきりしないテーマである。洗練とは、何よりも先ず言語能力の次元にあり、「単語の扱い方、それらの使い分け、諧調溢れる並べ方」(Isam. 31)を通して、感覚と思想を豊かにすることである。換言すれば、生徒自身のあり方を深く変容することである。従って、実例が示すように、文学教育(古典語と仏語)と結合しやすいテーマである(Isam. 98, 134)。第二の特徴として、このテーマは、特定の目的と結び付かないという無償性を帯びている。これを目指す教育は、他の何らかの目的に従属する手段ではなく、それ自体が目的なのである。そこから、このテーマにおける「一般的教養」とは、人間の諸能力の全般的発展を図ることであり、専門化することよりも多様な潜在的可能性の育成に重点があるとされる⁽⁴⁵⁾。

この見方は、ダルリュがその結論部⑬で「[哲学の学習]が精神全体を涵養し、人文

的教養の課程を完成し閉じる」と述べていることに合致するかのようにみえる。既に⑨で展開されていた議論を思い起こそう。

[哲学は] 諸君の思考をあらゆる方向へ高めると主張しており、予め特定の方向に決定してしまうことは欲しておりません。[...] 神は、我々が諸君の高貴な能力を無思慮にも芽のうちに潰してしまったり、諸君の内なる人間性を狭めたりしないよう気遣って下さいます。この講筵に列しながら、いつの日かその頭上に天から霊的な息吹の降ってくる人々が静かに生い育っていることを忘れてはいません。きっとその人々は、その日が来れば、両親に別れを告げて霊的息吹の導くままに、知の苛酷な探究へ、或いは芸術の情熱的領域に、はたまた宗教的昂揚の屹然たる高みへと従い行く覚悟ができていないに違いありません。(p. 9)

つまり特定の活動を目指して準備をするのではなく、「人間性」或いは「精神全体」を陶冶するのが哲学の役目だとされている。また、その陶冶の鍵とされているのは、やはり言葉の扱い方である。それについては、⑥と⑩で言及されている。

物の考え方を形成するには、諸君に言葉の鍛練を課する必要があります。これらの言葉[ダルリュが演説中に使った「世界」「大地」などの壮大な観念を示す単語のこと]の秘密を知り、言葉を真理に則って扱えるのは我々だけです。我々はまた、諸君を厳しく扱い、その精神が包囲を受けて攻め立てられた時に、生きていない言葉、誠のない言葉が、諸君の側からも漏れ出ないようにするのは、我々の務めです。⑩(p. 10)

しかし、ここでのテーマの現れ方は、イザンベール＝ジャマティの指摘する諸例とはやや異なる。前記のように、このテーマは多く、文学との関連で出現するとされている。まさしく、言葉の錬磨を通して感性の洗練が目指されるのである。「読書をなさい。そして、人間の作品のあらゆる美を愛することを学んだ為に、知性はより豊かに、感性はより洗練され、魂は喜びに包まれて戻ってきなさい。」(1922年カオールでなされた演説の引用、*Isam*. 208.)。しかし、ダルリュにおいては、必ずしも、このような美的次元で現れていない。むしろ、真理性が言葉の錬磨の目標とされているように思われる。これは、⑥の言及で一層明白になるだろう。

例えば、[哲学は] 子供のときから[我々が生徒の] 用いてきた言葉を探り上げます。彼らを前にして言葉を開いてみせ、そこに詰まっているのが、観念ではなく、他の言葉であることを発見して見せるのです。しかし、今度はその言葉がまた開かれると、別な言葉を含んでいる。そんな具合に限りなく続きます。(p. 5)

これは論理学における定義の問題に触れているのであり、文学とは何の関係もない。更に、⑥での議論は、論理学を通じて、哲学が自然科学の方法論的基礎づけを行なっていることを語り、自然科学の人類への貢献にも触れていく。

従って、言葉の真理性が美的価値をも兼ね備えることを前提とした時のみ、このテーマは哲学教育に包含されることになるだろう。

(4)「外界の変形手段の獲得」と「上層の社会階級への統合」のテーマ

この二つのテーマは、ダルリュの演説の中にはっきりと現れるものではないが、後で述べるように、ダルリュの時代決して無視できないテーマであったので、ここで簡単に扱っておこう。

「外界の変形手段の獲得」という目的の背景には、何よりも先ず、自分の外部の世界を変形しようという意志がある。従って、知識の獲得も、単なる知的な操作能力の向上に止まらず、行動能力の増進に繋がらなければならない。そして、行動とは、自然の支配と利用によって、人類の福祉に貢献することなのだが、直接自然に向かうのではなく、他の人々に働きかける発案者、計画者、指導者としての役割を果たすことなのである (Isam. 33-35)。

一方、「上層の社会階級への統合」のテーマとは、中等教育の教育内容、特に古典語の知識が、それを身に着けたものとそうでないものとの間に「障壁」*barrière*を作りだすことを肯定するものである。こうして、「品のある」*distingué* 人々は、その教養の共通性によって財産や出身地の差を越えて、均質化される(「水準」*niveau*)のである (Isam. 30. cf. 91, 97-98.)⁽⁴⁶⁾。

生徒の卒業後の道についてダルリュはごく僅かしか語らない。前節で引いた⑨の箇所では知的・芸術的活動や宗教について語っていると⑩で更に理科バカロレアを目指す生徒に向けられたと覚しき言葉との他は、生徒を一括して、「新しい市民」⑪とか、「実生活のいろいろな小怪に入る」⑫とか、言うだけであり、そこから、哲学教育が「外界の変形手段の獲得」を目的にするという考えを引き出すことはできない。また、「上層の社会階級への統合」のテーマについて言えば、哲学が中等教育課程の「頂上」として、「コレッジの観想的生活の見事な統一性」⑬を生徒に感じさせる以上、中等教育全体の目標に背馳することはないわけだが、殊更にこのテーマを強調するような言辭は、ダルリュの演説に見られない。このように、この二つのテーマは、潜在的には存在するのかもしれないが、表面的には非常に影が薄いのである。

(5) 真・美・善と哲学教育 — 「永遠の価値への参入」のテーマ

哲学教育が「永遠の価値への参入」(Isam. 29-30) というテーマと結び付くことは、イザンベール＝ジャマティも指摘するとおり (Isam. 97)、容易に推測されるところである。このテーマによれば、普遍的・万古不易・絶対の価値が存在し、その価値に生徒を与らせることこそ中等教育の目的となる。この価値は、通常、真・美・善の三つ組で

語られるが、その背景にV.ケーザンの哲学があることは言うまでもない。また、このテーマを説く人々は、「諸観念の内容充実と明瞭化こそこれらの永遠絶対の価値に通ずる特権的道である」(Isam. 29)と言い、偉大な文学作品・芸術作品を、これらの価値の言わば翻訳であり、我々と至高の価値とを繋ぐ媒介として、イニシエーションの有効な方法と考える。

ダルリュの演説の中核もこのテーマの変奏であるように考えられる。⑥から⑨にかけて、真・美・善がこの順序で採り上げられていくからである。⑥では、既に見たように、自然科学など諸学の方法論的基礎付けとしての論理学について語られているのだが、その結びにおいて、プラトンの洞窟の比喩(『国家』第7巻。1874年のカリキュラムの講読用著作家リストにこの巻が指定されている)を引いて、真理の観念の超越性を説く。

[プラトンは]諸君に、あらゆる観念は牢獄であり、哲学が囚人を解放すると彼のしばたたく眼が初めの内は限り無き真理の大いなる光に堪えられないことを教えるのです。(p. 6)

哲学による精神の解放とは、「本能的信念」(p. 6)つまり日常の臆見 doxa からの解放であるが、この批判的機能だけが哲学の務めではない。次の美の礼讃に進む為の一階梯に過ぎない。哲学が、⑤で言われているように、生徒に普通と違った「眼」を与えるならば、日常世界の中の美の再発見こそ哲学に相応しいことかもしれない。

ところがです、哲学は、事物の外観を更新し、それらの色彩を蘇らせ、習慣の生み出した無気力から思考活動を引き戻し、思考に驚きの感覚を返し、事物の真理をなすものこそ、それらの美であると理解できるように思考に用意をしてやるのです。⑧ (p. 7)

ここで、「驚きは愛智=哲学の始まり」としたプラトン(『テアイテトス』155D)やアリストテレス(『形而上学』第1巻982b12)の言葉を想起することもできよう。

では、「善」についてはどうであろうか。⑨においてダルリュはこの問題に触れているが、その口調は、遠回しな、暗示に富んだもので、その旨とする所が掴みにくい。しかし、当時の哲学の参考書(教科書)⁽⁴⁷⁾を参照しながら、解読してみよう。

さて、この段落は、先ず、前段の「故に、美学は、哲学講義の一部ではなく、むしろ哲学全体が一個の美学講義になるべきです。」(p. 7)との結びを受けて、「同じように、それはまた、全体が倫理学講義であるべきです。」という言葉で始まる。すでに⑧で「真=美」の関係が成立したのに続いて、ここで、あたかも「美=善」であることを言わんかのようにである。そして、ダルリュは、幸福の問題を採り上げて倫理学にとって

重大な問題である最高善 *souverain bien* の問題を導入しているようにみえる。先ず、物質的幸福を追求する唯物論的倫理学は退けられる。善の根本原理は物質から転じて魂の方に求められねばならない(「古代人の夢想した、気分を爽やかにする素晴らしい果実が実る天上の園生は、いつも実在するのです。我々は胸中にそれを携えているのですから。」p. 8)。宗教は尊重されるが、哲学をそれに従属させる考えには賛成しない(本稿 111 頁で引用の多方面に才能を開花させる哲学のテーマを参照)。結局、ダルリュは、経験論的な倫理学にも与せず、超越的な神からも独立した倫理学、つまりボワラックのいう所の、理性に唯一の根拠を求める合理的倫理学 *morale rationnelle* をここで念頭に置いているのだろう。その理論では、善の理想は、「人間生活における現実性、調和、普遍性の可能な限り最高の段階⁽⁴⁶⁾」つまり、人間性の完成であるとされている。ダルリュが語る、「精神のあらゆる美質がそこに結び付き、人事百般の調和を十分にそこから味わえるような一つの点」(p. 9) というのも、まさに、人間の究極目標としてのこの善の理想のことではなかろうか。

この「永遠の価値への参入」は、偉大な哲学者の著作を通じて為される。ここでダルリュが名を挙げている哲学者に限れば、カリキュラムでは、『ニコマコス倫理学』第 8 巻(1880)、第 10 巻(1885)、『神義論』抜粋(1874)、『单子論』(1880、85、95)、『人間知性新論』序文・第 1 巻(1885)、『道德形而上学原論』(1895)が、講読用に指定されているが(数字は、カリキュラムの制定年)、リセの哲学教授は、「通訳」*truchement*(p. 9)として、これらの著作を生徒に解き明かすのである。

学年の最後にあたって、今こそ私は、[これらの先哲]が著書の口絵に象形文字で書いた文句を諸君に言うことができます。「普遍的なるものを感じ取り思考する為に無私になること。」これこそ文明の要諦です。しかし何と抽象的でしょうか。よろしいですか、これを学んだ私たちが、今度は諸君にそれを綴らせ、絶え間ない註解によって諸君にとって目に見える近しいものにし、模範による薫陶、習慣の圧力によって、諸君の魂の奥底まで、魂の柔軟性の多少に応じておそらく多少の差はあるにしても、その言葉を沈み込ませ、そしてついには、空虚な公式が諸君の生ける思考の形式となるようにしなければなりません。これこそが、哲学教育の全目標なのです。(p. 9-10)

このように、イザンペール=ジャマティの挙げる「永遠の価値への参入」のテーマが、ダルリュの演説をも一貫していることは今や明らかであろう⁽⁴⁷⁾。では、このテーマの思想的素地となった、クーザンの哲学まで、ダルリュは引き継いでいるのだろうか。この問題については、次節で検討されよう。

【演説の位置づけ】

ダルリュの演説は、その時代の中でどのように位置づけられるだろうか。イザンベール＝ジャマティによれば、これらの中等教育の主要テーマの出現状況⁽⁵⁰⁾から言うと、ダルリュの演説の属する1876年から1885年に至る期間は、「外界の変形手段の獲得」のテーマが圧倒的な優位を占めた時代として特徴づけられる(優勢係数+45)。ところが、ダルリュの演説にはっきりと現れる「永遠の価値への参入」のテーマは、その前の、1860年から1870年の期間で5テーマ中で首位を占めていた(+25)のに対して、この期間では、きわめて小さな出現率(+1)に落ち込み、最下位になっている。しかし、この時代でも、哲学教育に関する演説では、この「永遠の価値への参入」のテーマが、他の教科に見られぬような高率(+36)で出現しているのである⁽⁵¹⁾。

この2つの事態は、一体何を意味するのか。イザンベール＝ジャマティは、「この急落は、この目標への人心の全面的離反のせいではない」(Isam. 128-129)と指摘し、また、この目標に対しての反対のためでもなく、その真の原因はテーマの陳腐化にあるとした(Isam. 129)。弁士がそのテーマに触れるのもはや慣習に過ぎず、そこに信仰はないのである(Isam. 129)。一方、このテーマに執着している哲学は、この期間「正確に前時代の線に止まっているのだから、保守的と規定できるような全く特殊な役割を演じている」(Isam. 134)が、それはクーザンの哲学の影響の残存であるとされている。その証拠として、イザンベール＝ジャマティは、1880年代初めでも依然、『真・美・善について』が褒賞 livre de prix の間で「特権的地位」を占めていることを挙げている(Isam. 134 註1。しかしその典拠は示されていない)。けれども、またこの現象は1876年から1885年に至る期間に特有なものである。次章で検討された1896年から1905年の期間を見ると、哲学は「永遠の価値への参入」のテーマから離れて、「作業装置の訓練」のテーマとの結び付きを示している。イザンベール＝ジャマティは、そこに、カント哲学の影響下にある世代の登場に伴う哲学の自己規定の変化と(Isam. 134)、哲学における「批判精神」の発展を読み取っている(Isam. 172)。

この時代状況と哲学の教育観のゆるやかな変化の中で、ダルリュの演説をどうとらえるべきかが、最後に語られねばならない。

【ダルリュの教育観】

「永遠の価値への参入」という陳腐と化したテーマ、しかし、それに反対することは勿論できない。演説者は、言い古されたテーマでも新しい語り口で聴衆の心を捉えねばならないのである。一体、どうやってこの難題をダルリュは切り抜けようとしたのか。我々は、彼による哲学の定義づけにその切り札を見出したい。

哲学とは何か。かのジュール・ラシュリエは、かつて教壇からこう問い掛けた後、答えを待ち受ける生徒たちに向かって「私にはわからないのです」と率直に付け加えたそうである⁽⁵²⁾。この逸話を知ってか知らずか、ダルリュもまた、始めに(③)、この問いに対し即答できなかったことを語る。しかし、これは聴衆の安易な期待を挫くレトリ

ックであろう。続いて、少しずつ様々な述語を哲学に与えながら、中等教育において哲学教育の占める位置を明らかにした後、哲学の「形相的定義」*définition formelle*⁽⁵³⁾を提示する。

この観点では、もし、私が、哲学とは単に物事の見方 *une manière de regarder les choses* であると言っているとしたならば、私は余りに言い過ぎであり、また厳密の行き過ぎで私の思考を人は非難するでしょうか。⑤ (p. 4)

実に慎重な口ぶりである。彼は非現実の条件節を用いているが、「物事の見方」という定義を引っ込めるつもりはない。ありのままに見さえすればよいという単純な写実主義を揶揄した後、ラマルティエヌの或る逸話を引きながら、こう言う。

しかし、お蔭様で、世界は、人が信じさせたがっている程に単調ではありません。世界は、時間と人によって多くの姿をとるからです。実際、私達は一人一人、自分の魂の色に染め上げられた独自の世界の中で生きているのです。[...] オートランが若い時のこと故郷の町の近郊にラマルティエヌを案内して遠足をしたことがあったそうで、その折彼が驚いて認めたことに、客人はマルセイユの丁度灰色がかった野原の一本一本の木にイチジクグワ *sycomore* を発見し、つまらない洗濯場の洗濯女達にナウシカアの集まりを見出せるように思っていたというのです。この逸話から、ラマルティエヌの眼が卑しかったなどと結論してはいけません。そうではなくて、ただ、かの人はオートランとは別な眼を持っていただけなのです。⑤ (p. 4-5)

「丁度灰色がかった野原」*campagne, alors grisâtre*、「つまらない洗濯場」*lavoir banal* という卑近な光景と、おそらく聖書の(或いはその外典に基づく)イメージ(*sycomore*)やホメロスの幻想(*Nausicaa*)の二重写し。このように詩人のヴィジョンの源泉には広義での文学的伝統があるわけだが、偶然眼に映じた景觀に美を発見させその発想を作動させたものは何だったのか。ダルリュはあからさまにはしないが、そこに哲学教育の働きを認めたに違いない。こうしてこの逸話は、既に検討した、日常の中に埋もれた美の発見という使命(⑧)と見事に呼応し、「物事の見方」という哲学観の例証となるのである。

また、論理学には、この哲学観が最もよく適合するであろう。事実、ダルリュは、ラマルティエヌの挿話の直後に、「哲学は、我々の生徒に別な眼を与えるのです」⑥ (p. 5)と切り出してから、一例を挙げればという感じで、論理学の役割を述べている。普段使い慣れている言葉 *mots* と観念の関係の再検討を通して、言葉を厳密に使用することをそこで訓練するのである。

しかし、哲学はこのような知的訓練に止まらない。もう一度⑧に戻ろう。本稿113頁で引用した、日常の中の美の発見に関する文章の後に、こういう一節がある。

諸君のカリキュラムが述べているように美の学問というものがあるのかどうか、しかとは存じません。そのように呼んでいるものは、心理学に由来する曖昧な一般概念と諸君にはどうでもよいような職業人的技術とから成り立っております。[...] 美は教えられません。というのも、美はものでも、対象でもないからですが、美を感じ取ることは教えられるのです。(p. 7)

明らかに、知識の集合として覚え込むべき「美学」が疑問視されている。しかし美を感じ取る訓練がどのように為されるのかについては語られていないように見える。だが、倫理学について触れた次の段落——これもやはりドグマとしての倫理学の否定なのだが——の最後にある、先哲の書物の講読に関する一節(本稿114頁で引用)を考え合わせれば、例えば、文学の美が読書という実践を通して感じ取られるように、おそらくダルリュは、哲学或いは文学の優れた作品を生徒と共に読むことで、生徒の美に対する感受性を鍛えようとしたのではなかろうか。

ここで、ブルーストが『ジャン・サントゥイユ』の或る断片の中で描いている一場面をもってその傍証としよう。このエピソードは、『胡麻と百合』訳注⁽⁵⁹⁾の中での言及によって、ダルリュとブルーストとの間に実際に起こった出来事と見てよい。場面は、ミシュレの『人類の聖書』とクセノポンの『ソクラテスの思い出』(2巻7章アリストコスという人物の話)をブーリエ先生が、新年の贈り物を持って訪れたジャンに読み聞かせるところである。その後、先生はこうクセノポンの文章について語る。

「[...] 古代は十九世紀じゃあないが、しかし同じように素晴らしいのだ。もう絶対にこんな風には書ける人は現れないだろう。これは実にあっさりとしているが、そのくせすべては言い尽されている。この時代の人は、思想を展開させようとしなかったのだね。思想を切り開いて、内部に含んでいるものを取出したりするのではなくて、そのまま思想を提出していたのだ。おかげで、うぶ毛のような手ざわりも、その新鮮さも、失われることがなかったのだよ。」⁽⁶⁰⁾

この言葉を謹聴したジャンは、後で読み返した時に、その一節に「思いもかけなかった魅力」⁽⁶¹⁾を発見したのである。

さて、以上の検討から、ダルリュの演説に罩められた教育観を最後にまとめよう。彼にとって、哲学とは、「物事の見方」であるが、それは或る特定の見方を、教義として生徒に教え込むことではない。言葉の使い方の訓練(それは具体的には小論文 dissertationとして生徒に課されよう)や原典講読を通じて、生徒自身の見方を形成すること

なのである。ここで再び、ダルリュの引いた、ポール・ロワイヤルの格言を想起こそう。「理性の完成の為に学識を使うべきなのだ。」(③)この言葉は、今述べた文脈で、中等教育における哲学教育にもあてはまるだろう。結局、ダルリュは、哲学教育を、ソフィスト流の専門知識の伝授からソクラテスの産婆術へと変貌させることを考えているのではなかろうか。かくして、「永遠の価値への参入」を説きつつも、新しい哲学教育の姿をこの演説で描いているのである。

ダルリュとブルースト ― 終わりに

このボルドーでの演説から7年後ダルリュはブルーストと出会うことになるが、リセ・コンドルセでの彼の授業の様子は、前記フェレの著書で引かれた視学官らの報告書によく窺える。1889年2月15日(丁度ブルーストが哲学級に在籍していた年度にあたる)総視学官ジュール・ラシュリエは、ダルリュの教室を訪れて次のような報告を認めている。

「今年参観したダルリュ教授の授業は、生徒の意見発表 exposition ですべて満たされていた。その発表は、教師の指摘或いはむしろ、五六人の他の生徒が活潑に参加する長い会話で時々中断された。発表は、難しい主題についてよく準備され本当に力強かったし、教師の言葉は、表現豊かで、気兼ねもなく、いつもの熱気を帯びていた。しかしとりわけ印象深かったのは、生徒の発揮した熱意、彼らの知識、洞察力、哲学的精神である。ダルリュ氏は、思考し思考させ、哲学を愛し愛させる教師である。成功するには、氏に、コンドルセの非常に知的な環境が必要だったのであり、着任以来、その名声は増すばかりであった⁽⁵⁶⁾。」

この簡潔な報告によって、1881年の演説での教育方針がここに見事に結実しているのを我々は確認する。ブルースト個人の反応は、『ジャン・サントウイユ』やダルリュに宛てた唯一現存の書簡⁽⁵⁷⁾にも見られるが、最も興味深いのは、哲学の小論文⁽⁵⁸⁾であろう。ダルリュの厳しい指導の下でブルーストの言葉の訓練がどのように為されたのか、この問題を、当時の哲学教育の枠組みを参照しながら解明することが、残された次の課題なのである。

註

* 謝辞 本稿で紹介された資料は、筆者が1991年度の「東京大学大学院学生学術研究奨励金」の給付により可能となった渡仏調査で入手した成果の一部である。ここに紙

面を借りて、東京大学総長を始めとする関係の大学当局の方々、推薦の労をとって下さった塩川徹也先生、紹介状を書いて下さった保苅瑞穂先生に深く感謝申し上げます。

記号 本稿では、特に次の略号を用いる。

BA : *Bulletin administratif du Ministère de l'Instruction publique [, des Cultes et des Beaux-arts]*, 1864–1932.

BSAMP : *Bulletin de la Société des Amis de Marcel Proust et des Amis de Combray*, 1950–. (1989年 *Bulletin Marcel Proust* と改称)

DBF : *Dictionnaire de biographie française*, Letouzay et Ané, 1933–.

RMM : *Revue de Métaphysique et de Morale*, 1893–.

RPh : *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 1876–.

- (1) Marcel Proust, *Jean Santeuil*, éd. établie par Pierre Clarac, Gallimard, 1971, Bibl. de la Pléiade, p. 8.
- (2) André Ferré, *Les Années de collège de Marcel Proust*, Gallimard, 1959 (Vocation, 8); Henri Bonnet, *Alphonse Darlu (1849–1921) : le maître de philosophie de Marcel Proust* Suivi d'une étude critique du «Contre Sainte-Beuve », Nizet, 1961.

André Canivez, *Jules Lagneau, professeur de philosophie : essai sur la condition du professeur de philosophie jusqu'à la fin du XIX^e siècle*, Belles-lettres, 1965. 2 vol.; Paul Gerbod, «L'Université et la philosophie de 1789 à nos jours», *Actes du 95^e Congrès national des sociétés savantes. Section d'histoire moderne et contemporaine*, t.1 : *Histoire de l'enseignement de 1610 à nos jours*, Bibliothèque nationale, 1974. p. 237–330; Jean-Louis Fabiani, *Les Philosophes de la République*, Ed. de minuit, 1988, (Le sens commun).

本稿は、特にファビアニとジェルボの上記の研究に多くを負っている。なお、教育史の研究の手引きと哲学史概観については、それぞれ次の二著が大変役立った。Institut national de recherche pédagogique, Service d'histoire de l'éducation, *L'Histoire de l'enseignement, XIX^e – XX^e siècles, Guide du chercheur*, sous la dir. de Thérèse Charmasson, INRP/Publ. de la Sorbonne, 1986; 九鬼周造『現代フランス哲学講義』(『九鬼周造全集』第8巻)岩波書店、1981年。

- (3) Alphonse Darlu, *Discours prononcé à la distribution solennelle des prix du lycée national de Bordeaux le mercredi 3 août 1881*, Bordeaux, imp. G.Gounouilhou, 1881, 12 p. BN Imp.[8° R. Pièce 1850.
- (4) Bonnet, *op. cit.*, p. 11–12. なお、BAで彼の履歴を追跡することができる。1885

年までは、次のようになる。t.5, p.90; t.8, p.326; t.10, p.252, 365; t.14, p.195, 250; t.16, p.753; t.19, p.902; t.21, p.959; t.22, p.645-646; t.23/2, p.1613-1614; t.25, p.27; t.35, p.455; t.36, p.366; t.37, p.110, 640; t.38, p.634, 675。また、近年刊行された総視学官に関する人物辞典に、ダルリュについての公文書などの記録の資料案内がある。Isabelle Havelange et al., *Les Inspecteurs généraux de l'Instruction publique : dictionnaire biographique, 1802-1914*, établi sous la dir. de Guy Caplat, INRP/CNRS, 1986, (Histoire biographique de l'enseignement), p.281。

- (5) これは、実質的には左遷である。父ルイ・デジレは、1848年12月ルイ・ナポレオンの大統領選出後成立した秩序党内閣(ファルー文相)、49年10月成立の超議会内閣(パリュエ文相)による厳しい教員統制の犠牲者であった。詳細は、19世紀の中等教育教員に関するP.ジェルボの博士論文に取り上げられている。Paul Gerbod, *La Condition universitaire en France au XIX^e siècle : étude d'un groupe socio-professionnel, professeurs et administrateurs de l'enseignement secondaire public de 1842 à 1880*, Université de Paris, Faculté des lettres et sciences humaines, 1965, p.229, 261, 266。

- (6) ベルジュラックは、宗教戦争からナント勅令の廃止まで新教徒の重要拠点であったことで知られているが、哲学者メヌ・ドゥ・ビランゆかりの地でもある。ペスタロッツィの理念に共鳴する程、教育に多大の関心を寄せていた彼は、ここの副県令の在任時代、将来コレージュとなるべき中等学校の創設に尽力した(Henri Gouhier, *Maine de Biran par lui-même*, Ed. du seuil, 1970, p.54-57 参照)。

また、ダルリュの同輩の哲学教授の中にも、当地の出身者が数えられる。後に中等教育局長となり、広く知られた哲学の教科書を著したエリ・ラビエは、この町の出身で、ここのコレージュを経て、トゥルーズ、パリで中等教育を受けている。また、社会的カトリシズムの流れを汲む *La Quinzaine* 誌の創刊者のジョルジュ・フォンスグリーヴも、その近郊の出身でベルジュラックの小神学校に学んだが、教職に転じた後に、ベルジュラックのコレージュで教えたことがある。

- (7) BA t.8, p.370。
(8) 1871年アグレガシオン二次口述試験のプログラム。原典注釈(希・羅・仏語より各1を籤引きで選択)の著作家表と模擬講義の主題が、予め発表されている。

Textes : Platon. - Le Sophiste; Aristote. - Métaphysique, livre VII; Cicéron. - De finibus bonorum et malorum, livre I^{er}; Sénèque. - Lettres (de la vingtième à la cinquantième); Leibnitz[sic]. - Nouveaux essais sur l'entendement humain (avant-propos et livre I^{er}); Malebranche. - Recherche de la vérité, livre III。

Sujets de thèse : 1 Rapport du Platonisme et du Pythagorisme, principalement d'après Aristote; 2 Rapport de la philosophie des Cyniques avec celle des Stoïciens; 3 Principes

de la physique des Stoïciens; 4 Théories comparées de Locke et de Leibnitz sur l'origine des idées générales; 5 Théories comparées de Leibnitz et de Kant sur le temps et l'espace; 6 Morale de Kant.

(BA t.13, p.471-472 (30 nov.1870))

- (9) 1880年からは、エスピナスがファキュルテの教授となる。
- (10) 上に挙げた、マリオン、エヴランともボルドーからパリに転出している。フイエは、一旦パリ行きを断ったが、文相ジュール・シモンの強い勧めで高等師範学校に迎えられる。ところで、1876年末現在で、リセの教授の俸給を比較してみると、第4カテゴリーのペリグーのリセで、正教授3級の俸給が3000フラン(ダルリュは着任当時はまだ担当講師 chargé de cours であったので、もう少し安い)であるのに対して、第2カテゴリーのアングーレムでは、3級が3600フラン、同2級が3800フラン、第1カテゴリーのボルドーでは、2級が4800フラン、1級が5000フランである。ところが、パリのリセ(カテゴリー外 hors de classeと呼ばれた)では、最低の4級でも6000フラン、1級なら7500フランという優遇ぶりなのである(出典 *Statistique de l'enseignement secondaire en 1876*, Imprimerie nationale, 1877, p.40-41)。
- (11) ダルリュの生徒の中から、哲学の道を志したものとして、ルイ・クテュラ、レオン・ブランシュヴィック、『形而上学倫理学雑誌』創刊やフランス哲学会創立の中心人物グザヴィエ・レオン、エリ・アレヴィ(ダニエルの兄)の名が挙げられる。Fernand Greg, *Mon amitié avec Marcel Proust (Souvenirs et lettres inédites)*, Grasset, 1958, p. 24-25. なお、グザヴィエ・レオンは、ダルリュの死後、追悼記事を著しているが(*RMM Supplément au n° d'avril -juillet 1921*, p. 1-3)、その中で *RMM* 創刊号の「Introduction」がダルリュ自身の手になることを明かしている。
- (12) 彼は、ラヴァルのリセを卒業後は、父の死の為に高等師範学校への進学を諦め、コレージュで教えながら、殆ど独学でアグレガシオンの試験の準備をしていた。1864年、前年に復活した哲学アグレガシオンを首席で突破した後、精神科学政治学アカデミーのコンクールに2度優勝し、ソルボンヌにおけるその博士論文の公開審査で保守勢力からの罵々たる非難を浴びたが、1872年高等師範学校の講師に迎えられるなど、輝かしい経歴を歩んでいた。しかし、それまでの猛勉強が祟ったのか、網膜剥離で片目を失明し、1875年高等師範学校をやむなく休職(正式な辞任は1879年)したあとは、南仏マントンで、夫人(G.ブリュノの筆名で、『二人の子供のフランス巡歴』 *Le Tour de la France par deux enfants* という今日でも有名な小学校読本を著した)とその連れ子で哲学者ジャン・マリー・ギュイヨと暮らしながら、旺盛な執筆生活を送り、『両世界評論』、『青色評論』、『内外哲学評論』などへの精力的な寄稿やその著作を通じて当時きわめて強い影響力を及ぼした。

- (13) Article cité, p.2. なおこの証言には年代的矛盾がある(『プラトン』が『プラトン哲学』(1869)であるとすれば)。Fernand Faure (1853- 1929) は、統計学者、「第三共和政期の最重要人物の一人」(DBF) に当時数えられた政治家でもあった。ドルドーニュ県リベラック Ribérac に生まれ、ベルジュラックのコレージュ、ボルドー法科大学に学んでいる。 *Qui êtes-vous?* (1924) 参照。
- (14) ボネもこう述べている。「彼はフィエの勧めで、1868年リサンス・エス・レットルの試験に合格する。ついで、ボルドーの文科大学から借り出した数冊の本の助けをかりて、哲学のアグレガシオンの受験準備をした。彼は偉大な作品に挑み、とくにプラトンの作品をフィエの名著のなかで研究した。」(op.cit.,p.11)
- (15) これらは、ボネ作成のダリュの著作目録 (op.cit.,p.91-92) から漏れている。
- (16) *RPh* t.9, p.91.
- (17) *RPh* t.23, p.564.
- (18) *Ibid.*, p.561.
- (19) 1880年5月31日公教育高等評議会でのフェリーの開会演説 (BA t.23, p.549)。
- (20) «gouvernement des études entre les mains des hommes d'études». 1880年5月31日公教育高等評議会でのフェリーの開会演説 (*Ibid.*, p.553)。
- (21) 1880年5月31日公教育高等評議会でのフェリーの開会演説 (*Ibid.*, p.551) 参照。
- (22) 復活当時哲学を学ぶ生徒はまだ多くなかった。というのも、文科バシュリエ取得の為にその履修がまだ義務づけられていなかった為である(これは、1849年11月16日のデクレによる措置の結果)。哲学履修者が増加するようになったのは、皮肉にも1874年の「反動的」改革で、文科バカロレアが1年の間隔をおいて2部に分割されてからで(1874年4月9日のデクレ・同年7月25日の規則)、これにより、哲学未修者を排除でき、哲学級を真の最高学年に復活できたのである。Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800- 1967*, A.Colin, 1968, p.61; Canivez, op. cit., p.246参照。1919年にドミニク・パロディ(コンドルセの卒業生)は、その現代哲学の展望の中で、1890年前後に新しい哲学の勃興を認めると共に、当時のバリのリセにおける哲学教育の隆盛を伝えている(Dominique Parodi, *La Philosophie contemporaine en France : essai de classification des doctrines*, Alcan, 1919, p.13)。
- (23) 1880年の哲学カリキュラムについては、高等評議会委員のH.マリオンが成立過程や特色を次の記事で論じている。Henri Marion, «Variété. - Le nouveau programme de philosophie», *RPh* 1880, t.10, p.414- 428.
- (24) カリキュラムの本体 (programme) については、BA t. 23/1, p.960- 963、講読用の著作家リストは、*Ibid.*, p. 907 から取った。なお、当時のカリキュラムは、独立した冊子として、ドララン社 Delalain より刊行されている (*Plan d'études et programmes de l'enseignement secondaire classique dans les lycées et collèges (classes*

- de lettres) prescrits par Arrêté du 2 août 1880, nouvelle éd. ここでは、p.99-103)。
- (25) 1880年のカリキュラムの実質的な起草者としては、クーザンの弟子筋にあたる学士院会員でソルボンヌの哲学教授ポール・ジャネ Paul Alexandre René Janet (1823-1899)の名が挙げられている (Fabiani, *op. cit.*, p.45)。次の資料にもそのような指摘がある。Lionel Dauriac, «La philosophie de M. Paul Janet», *L'Année philosophique*, 1897, t.8, p.39-84, surtout p.41; Georges Picot, «Notice historique sur la vie et les travaux de M. Paul Janet», *Mémoires de l'Académie des sciences morales et politiques*, 1904, t.24, p.273-316, surtout p.310-311.
- (26) 1880年6月19日のデクレ及びアレテの中のデクレ第10条・第11条 (BA t.23/1, p.675-683. ここでは p.677)。
- (27) 唯心論的な哲学教育に対する当時の批判として、次のものがある。Alfred Espinas, «L'agrégation de philosophie», *Revue internationale de l'enseignement*, 1884, t.7, p.585-607.
- (28) 褒賞授与式に関する法規については、そのすべてを把握したわけではないが、一応次のものが、ブルーストの時代効力があったと思われる。基本的には、王立コレージュ (リセの当時の名称) に関する 1821年9月4日の規約の中の褒賞授与式の規定。1860年7月10日のアレテと 1873年10月29日のアレテ、更に 1913年4月23日のアレテによって修正されている。
- (29) コンクール・ジェネラルの研究としては、特にその答案のイデオロギ的分析として次のものがある (制度の概観、文献案内を含む)。Jacques Champion, «Le concours général et son rôle dans la formation des élites universitaires au 19^e siècle», *Revue française de pédagogie*, 1975, n° 31, p.71-82; Id., «Discours et idéologie : le concours général», *La Pensée : revue de rationalisme moderne...*, 1976, n° 189, p.80-97; Id., «Le «Concours général» de l'enseignement secondaire et son évolution, du discours français à la dissertation littéraire (1747-1983)», *Actes du 109^e Congrès national des Sociétés savantes, Dijon, 1984. Section d'histoire moderne et contemporaine*, t.2 : *Histoire de la Bourgogne et questions diverses*, Comité des travaux historiques et scientifiques, 1984, p.315-324.
- (30) この式場は、1889年から、新築の「新ソルボンヌ」の大講堂に移されたが、こちらは、ピュヴィ＝ドゥ＝シャヴァンヌの描いた『聖なる森』*Le Bois sacré* の巨大な油絵が壁面を飾っている。それまでは、旧ソルボンヌの、1822年に建てられ、ブリュドンとゴッスによる、諸学の寓意と大学者の肖像で構成された壁画、『不滅の棲み処』*Séjour de l'Immortalité* に飾られた大講堂で行なわれていた (Octave Gréard, *Nos adieux à la vieille Sorbonne*, Hachette, 1893, p.217-218; Jean Bonnerot, *La Sorbonne : sa vie, son rôle, son œuvre à travers les siècles*, Presses Universitaires de France, 1927, p.32-33, 104-107. 参照)。

- (31) 註(37)の一覧表の、1881、86、90、95、98の各年を見よ。
- (32) その演説の概要は、ボネの著書の中で纏められている(p.16-27)。なお、この演説について、当日列席した歴史家で教育改革の主導者の一人エルネスト・ラヴィスが、『青色評論』で感想を述べている(Ernest Lavisse, «Le concours général à la nouvelle Sorbonne», *Revue politique et littéraire : Revue bleue*, n° du 9 août 1890, t.46 (ann.27/2), p. 161-162)。
- (33) *Livres d'enfants, livres d'images*, Catalogue établi et rédigé par Ségolène Le Men, Ed. de la Réunion des musées nationaux, 1989, (Les Dossiers du musée d'Orsay, 35), p.16-18, surtout p.16.
- (34) コンクール・ジェネラルの褒賞授与式の模様は、BAで報じられた他、*Le Temps*のような一般紙でも大きく取り上げられた。大臣の演説は、官報・BAに再録されたほか、一般紙にも掲載された。リセ教授の演説は、BAに再録されないことも多く、場合によって新聞、『青色評論』や『国際教育評論』などに掲載された。受賞者のリストは、官報・BA・新聞に掲載された。なお、19世紀ラールの「concours」「discours」の項にあるコンクール・ジェネラルやその褒賞授与式の演説に関する記事は、第二帝政末期の生彩あるエピソードに富んでいて興味深い。なお、以上の本稿での描写は、特定の年度のものではなく、上記の資料を参照して、大体1880年代の様子を再構成したものである。
- (35) *Revue universitaire*, t.12/2(1903), p.127.
- (36) 更に、この提案に基づいてなされた公教育高等評議会での審議・採決(1904年4月22日)の結果を見ると、コンクール・ジェネラルの廃止が28対16で可決されたのに対して、新たな式典の創設については43対1という圧倒的支持が集まっている(BA t.76, p.354)。
- (37) ここで、参考までに1881年から1903年までのコンクール・ジェネラルの褒賞授与式で行なわれた、リセ教授の恒例演説の題目を挙げておこう。
- 1881 Henri Marion, philo., He - «De l'importance pratique des études philosophiques»
- 1882 Talbot, rhét., Co - «De l'idée dans l'éducation moderne»
- 1883 Evagériste Bernès, math. élém., LG - «Le rôle des sciences et des lettres dans l'enseignement »
- 1884 Régis Jalliffier, hist., Co - «Les provinces françaises et l'unité nationale »
- 1885 Mothéré, angl., Ch - «Du rôle des langues vivantes dans l'enseignement classique»
- 1886 Elie Rabier, philo., Ch - «Du rôle de la philosophie dans l'éducation»
- 1887 Henri Chantavoine, rhét., He - «De l'utilité des études classiques dans une démocratie»

- 1888 Blanchet, hist., Ch - «Enseignement secondaire et la société contemporaine »
- 1889 Emile Faguet, rhét., JS - «Education de la volonté »
- 1890 Alphonse Darlu, philo., Co - «L'enseignement de la morale »
- 1891 Fabié, lettres(ens. mod.), Ch - «De la poésie dans l'éducation et dans la vie»
- 1892 Seignette, sc. natur., Co - «Du rôle des sciences naturelles dans l'enseignement secondaire»
- 1893 Schweitzer, allem., R - «Les langues vivantes; leur rôle dans le monde moderne, la manière de les enseigner »
- 1894 Rocheblave, rhét., Lk - «Les humanités et la vie »
- 1895 Henri Bergson, philo., He - «Le bon sens et les études classiques»
- 1896 Paul Desjardins, rhét., M - «L'éducation qui unifie»
- 1897 Edouard Petit, lettres(ens.mod.), JS - «Université et solidarité»
- 1898 Victor Delbos, philo., He - «L'éducation en vue de la vie sociale»
- 1899 Dufayard, hist., He - «L'Histoire et la Vie»
- 1900 Bompard, rhét., LG - «De la valeur éducative de la littérature française»
- 1901 Blutel, math. spec., SL - «Du rôle de l'enseignement des mathématiques dans la formation de l'esprit »
- 1902 Nollet, rhét., Ho - «La culture classique et l'éducation intégrale »
- 1903 Abel Chevalley, angl., V - «L'esprit de notre temps et l'enseignement des langues vivantes»

校名の略号—Ch : Charlemagne; Co : Condorcet (Fontanes pendant 1874 - 1883) ;
 He : Henri IV; Ho : Hoche (à Versailles); JS : Janson de Sailly; LG : Louis-le-Grand;
 Lk : Lakanal; M : Michelet (à Vanves); R : Collège Rollin (municipal); SL : Saint-Louis;
 V : Voltaire.

- (38) BA t.16, p.823-824.
- (39) 恒例演説を行なったマリオンは、*La Grande Encyclopédie* の「concours」の項を執筆しているが、そこで、「式の興味は、公衆にとって、衣装の展示にあり、ついでコレージュ間の競争にある」と述べている (t.12, p.316)。
- (40) 原文では、「du rôle」と「des études philosophiques」との間に「et」が入っているのでこう訳してみたが、「et」のない方が文意をはっきりさせよう (「中等教育における哲学学習の役割について」)。なお、パリの国立図書館の所蔵目録の注記では、「(Sur le rôle des études philosophiques dans l'enseignement)」となっている (*Cat. gén. des livres imprimés de la RN, auteurs, [-1960], t.35 (1908), col. 981*)。
- (41) Viviane Isambert-Jamati, *Crises de la société crises de l'enseignement : sociologie de l'enseignement secondaire français*, Presses Universitaires de France, 1970, (Bibliothèque de sociologie contemporaine) . 以下、このテキストへの参照は、原則

として本文中で行ない、*Isam.* と略記して、頁数を添えるに止める。

(42) その統計的手法については、後註(50)を見よ。

(43) *Isam.* 29-52. ここに、残りの4つの領域とその諸テーマを挙げておこう。

知の対象——1)過去の人間とその作品、2)現代の人間、3)永遠・普遍の人間性、4)自然。道德教育の手段——1)脱宗教的国立のユニヴェルシテへの忠誠、2)その学校への忠誠、3)教育の条件・利点としての世事からの隔離、4)規律の教育的価値、5)同級生同士の性格形成作用、6)生徒の個人差の考慮、7)遊戯衝動の利用、8)教授の道德的模範、9)教授の意志的影響力。制度の位置づけ——1)中等教育の中心的定義が社会の変化に合わせて変わることは良いことである、2)中等教育の就学期間は、長期に渡るべきである、3)中等教育だけで、生徒に足りるべきであり、続きは必要でない、4)リセで、将来の職業準備をするには及ばない、5)顧客層は、社会的エリートである。参照される価値——1)完徳或いは定言的命令の個人倫理、2)快樂主義的或いは「精神衛生」の個人倫理、3)連帯の倫理、4)勤労の勧め、5)進歩の称揚、6)青春の称揚、7)家庭の称揚、8)祖国の称揚、9)平和と国際理解の称揚。

(44) Antoine Arnauld et Pierre Nicole, «Premier discours où l'on fait voir le dessein de notre nouvelle logique», *Logique de Port-Royal*, précédée d'une notice sur les travaux philosophiques d'Antoine Arnauld et accompagnée de notes par Charles Jourdain, Hachette, 1874, p.3-4.

(45) *Isam.* 215-216. 但しそこでは、1906年—1930年の期間が問題になっている。

(46) 「障壁」と「水準」とは、中等教育の選別機能に早くから注目した、哲学者エドモン・ゴブロの著書の題名(Edmond Goblot, *La Barrière et le niveau : étude sociologique sur la bourgeoisie française moderne*, 1925)に由来する。

(47) 本来なら、この演説と同時代かそれ以前のカリキュラムに基づく参考書を参照すべきところだが、今回は手元にある、やや後の時期に属するものを使用する。

Emile Boirac, *Cours élémentaire de philosophie conforme aux programmes du 31 mai 1902 suivi de notions d'histoire de la philosophie et de sujets de dissertations donnés à la Faculté des lettres de Paris*, 27^e éd, Alcan, 1918. (初版1888年)。ボルドーのリセでフイエに学んだボワラックは、リセ・コンドルセで、ダルリュの同僚であった。

(48) Boirac, *op. cit.*, p.341.

(49) 中等教育における「頂上」としての哲学のテーマについては、次を参照。Fabiani, *op. cit.*, p.49-50, 131-137.

(50) イザンペール=ジャマティによる、テーマの出現状況の数量化法については、*Isam.* 52-59を参照。優勢係数 coefficient de dominance とは、或るテーマに関し

- て言及するテキストの集合(部分的言及も含む)で、賛成の立場と反対の立場について、どちらがどれだけ優勢かを示すもの。賛成は+で、反対は-で表され、その絶対値の最大は、1000である(つまり、母集団の全テキストのあらゆる部分が、あるテーマについてのみ語り、その立場がすべて共通である場合を示す)。
- (51) イザンベール＝ジャマティの調査対象となった1860年から1965年に到る期間の、5大テーマの変動は、*Isam*. 65-68 でグラフ化され纏められている。また、調査対象の期間を7つ取り出してくる根拠もこの変動にあり、比較的安定した期間を一まとめにしているのである。なお、この段落で筆者の引いた数値は順に、*Isam*. 125, 89, 128, 134.
- (52) この話は真偽の程は不明だが、次の本に載っていたものである。アンドレ・ヴェルジェス、ドニ・ユイスマン共著『哲学教程』白井成雄、久重忠夫、高橋勝訳、筑摩書房、1980年、上巻、18頁。
- (53) «définition formelle»という語については、André Lalande, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, 16^e éd., PUF, 1988, p.210 に引かれた、Louis Liard, *Des définitions géométriques et des définitions empiriques*, p. 205-206(3 éd. (1903) では、p.174-175)を参照。
- (54) John Ruskin, *Sésame et les Lys*, traduit par Marcel Proust, Mercure de France, 1906, n. 1, p. 146. (Ed. établie par Antoine Compagnon, Bruxelles, Ed. Complexe, 1987, p. 218) .
- (55) 『ブルースト全集』第11巻『楽しみと日々/ジャン・サントゥイユ』筑摩書房、1984年、354頁、鈴木道彦訳を拝借した(プレイヤード版では267頁)。
- (56) Ferré, *op.cit.*, p.240.
- (57) フェレにより紹介されボネにより発表されたこの手紙は現在フィリップ・コルブ編集の『ブルースト書簡集』に所収。*Correspondance de Marcel Proust*, t. 1, Plon, 1970, p. 121-122. ダルリュと出会った翌日に書かれたと推定されている、この手紙は、哲学の授業を迎えた彼の心理状態を如実に物語っている。
- (58) 現在までに3つの存在が確認される。
 «Spiritualité de l'âme»(Ferré, *op. cit.*, p.224-229に所収)
 «Comment le Savant peut-il conclure du fait à la Loi»*BSAMP*, 1982, n° 32, p.484-492.
 この他、未刊であるが、1965年の展覧会に出陳されたものがある(Voir *Marcel Proust*, Bibliothèque nationale, 1965, p.15, n° 15)が、筆者が国立図書館の手稿部で閲覧したところ、カタログの注記と一致するのは、NAF 16611, f^{os} 46-48に見られる断片である(冒頭の紙葉が失われている)。

1880年 8月 2日のアレテによる哲学のカリキュラム

導入

学—諸学の分類—何が科学の哲学、歴史の哲学などと呼ばれるのか—哲学固有の対象、その区分

心理学

心理学の対象、それが研究する事実—固有の特徴—意識の諸段階と限界

心理学的事実と生理学的事実との区別と関係

心理学の情報源：意識・言語・歴史など—比較心理学の有用性—心理学における実験について—心理学的事実の分類

感性—情緒（快と苦）—感覚と感情—傾向と情念

知性—認識の獲得・保存・加工

獲得：意識と感覚器官からの所与

保存・結合：記憶・観念連合・想像力

加工：抽象的観念と一般的観念の形成、判断・推論

認識の主導原理：理性の所与、理性の所与は経験や観念連合あるいは遺伝によって説明できるか？

知性的活動の成果：自己の観念・外界の観念・神の観念

美学の基本：美—芸術—美術の原理と条件について—表現・模倣・フィクション・理想

意志—意志的行為の分析：自由

心理学的活動の様々な様態：本能・意志的活動・習慣

心理学的生の顕示：記号と言語

身体的なものと精神的なものとの関係—睡眠・夢・夢遊病・幻覚・狂気

比較心理学の初歩

論理学

論理学の定義と区分

形式論理学—観念と名辞—判断と命題—定義—演繹と三段論法

応用論理学—方法について：分析と総合

帰納論理学—自然科学の方法：観察・仮説・実験・分類・帰納・類推—経験的定義

これらの方法の心理学的科学への応用、歴史科学への応用—歴史の典拠：証言の批判

演繹論理学—抽象科学の方法：純理的定義・公理・演繹・証明—実験科学における演繹の利用

倫理学・法学・政治学における演繹と実験の役割

誤謬の本質・原因・治療

倫理学

思弁的倫理学—良心・善・自由・義務

最高善の様々な観念：功利主義的理論と感情的理論

義務の理論

義務と権利—人格の絶対的価値

徳性—責任と制裁

実践的倫理学—個人道徳：節制・叡智・勇気・人間としての品位・下位の者との関係

家庭道徳：家族

社会道徳：正義または法の尊重—権利—慈善

社会の基本、国家の概念

自然権・市民の権利・国家の権利の区別—投票—法律の遵守—兵役—祖国への献

身

宗教道德—神に対する義務

経済学の基本

富の生産—生産の動因：原料・労働・貯蓄・資本・財産

富の循環と配分—交換・貨幣・信用・給与・利子

富の消費：生産的消費と非生産的消費—奢侈の問題—国家支出—税・予算・公債

形而上学・神義論

確実性の問題—懷疑主義—觀念論

物質と生命に関する諸説

精神—唯物論と唯心論

神：その実在と属性—悪の問題—楽天主義と悲観主義

靈魂の不死

講義の結論—哲学の役割—知的・道德的・社会的観点からみたその重要性

哲学の歴史

学説一般について—主な哲学学説の定義
ソクラテス以前のギリシア哲学に関する

要説：イオニア学派・原子論者・ピュタ
ゴラス派・エレア学派・ソフィスト

ソクラテス—プラトン—アリストテレス
ソクラテス以後の諸学派に関する要説：

ピュロン派・エピクロス派・ストア学派・
アカデメイア学派

ローマの哲学とアレクサンドリア学派に
関する要説

スコラ哲学に関する要説

ルネサンス哲学に関する要説

17世紀の哲学—ベイコン—デカルトと彼の
主な弟子—スピノザ—マルブランシュ—
ライプニッツとロック

18世紀・19世紀の哲学に関する要説

原註：指示された問題がすべて取り扱
われるのならば、このプログラムで採用
された順番によって教師の自由が拘束さ
れるべきではない。

〔講読用著作家のリスト〕

フランス語著作家

デカルト『方法序説』・『第一省察』

ライプニッツ『单子論』

ラテン語著作家

キケロ『法について』（第1巻）

セネカ『幸福な人生について』

ギリシア語著作家

プラトン『国家』（第8巻）

アリストテレス『ニコマコス倫理学』
（第8巻）

付記：本稿の刊行にあたっては、平成4年度東京大学文学部布施学術基金学術奨励費の
交付を受けた。